The Japanese Journal of School Counseling
2017, No.17, 1-8

研究論文

アメリカにおける TIPS (Team-Initiated Problem Solving Model) の実際 ―学校におけるチーム支援の実現―

松山　康成　　福井　龍太　　市川　哲

（広島大学大学院）　（茨城県立医療大学）　（大阪産業大学）

本研究の目的は，アメリカにおける TIPS (Team-Initiated Problem Solving Model) の活用方法と運用の実際についての情報を収集し，日本の学校におけるチーム支援の実現に活用できるかを検討することであった。その結果，TIPS には次の 3 つの特徴が指摘された。1）TIPS のデータ収集は，何が，いつ，どこで，誰によって，なぜ，どのくらいの頻度で，と単純かつ明確であり，教員の役割を決めて分析・検討を行う。2）TIPS は，子どもの明確に定義された問題行動に着目し，その行動を学校環境の変容やスキルの教育を通して改善を図ることを目指している。3）教員の会議運営スキルの習得を目指した訓練プログラムも開発されているため，学校現場への導入は容易である。以上のことから，学校組織としてのチームによる機能的なアセスメントを重視し，データに基づいた支援を実現する TIPS は，わが国の学校現場においても運用することが十分可能であると考えられ，学校におけるチーム支援の実現の一助となることが示唆された。

［キーワード］PBIS (Positive Behavior Interventions and Supports), TIPS (Team-Initiated Problem Solving Model)，学校におけるチーム支援

1．問題と目的

（1）学校における子どもの問題行動

学校における子どもの問題行動の増加が注目されている。2012 年に文部科学省が実施した「通常の学級に在籍する，知的障害はないものの発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒」に関する調査によると，学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が推定値で 6.5％と示された。調査結果では，この数値以上に，通常の学級には教育的支援を必要とする子どもがいる可能性が指摘されている。また 2016 年に文部科学省が実施した「平成 27 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると，いじめ認知件数が，高校では平成 26 年度が 11,404 件だったのが平成 27 年度には 12,654 件，中学校では平成 26 年度が 52,971 件だったのが平成 27 年度に 59,422 件であった。小学校では平成 26 年度 122,734 件だったのが平成 27 年度には 151,190 件と，小学校におけるいじめ認知件数の増加が顕著 (前年度より 23.2% 増加) であった。また，学校内での暴力問題認知件数は，高校では平成 26 年度が 6,392 件だったのが平成 27 年度には 6,162 件, 中学校では平成 26 年度が 32,986 件だったのが平成 27 年度には 31,322 件であった。小学校では平成 26 年度 10,609 件だったのが平成 27 年度には 15,927 件と，暴力問題認知件数においても小学校で増加が顕著 (前年度より 50.1% 増加) であった。学校，とりわけ小学校における子どもの問題行動の増加は顕著であるといえる。昨今の学校現場では個別支援が必要な児童生徒と問題行動の増加と低年齢化が指摘されており，学校において問題行動への円滑な対応が喫緊の課題である。

（2）日本の学校における問題行動への対応の課題

子どもの問題行動への対応に対しては，これまで学校現場においていくつかの方法が用いられてきた。一つは学校でのチーム支援を目指した校内サポート会議 (大阪府教育委員会 ,2015) やケース会議 (佐々木, 2007) である。これらはファシリテーションの手法を用いて運営する会議であり，学校内部の教員がファシリテーターの役割を担う。その教員が会議の中心となって学校で生じる児童生徒の問題について，学校内でその子どもに関係する教員でチームを作り，そのチームで支援に取り組むために行われる。この校内サポート会議やケース会議には，問題の内容によってはスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーが会議をサポートし，子どもの問題の解決を目指す。このように多様な職種の専門家が会議自体を円滑に運用することを目指すファシリテーションは，近年注目されている学校内における問題解決方法の一つである。しかしファシリテーションを用いて運営する会議には問題がある。ファシリテーションでは，専門家によって会議が円滑に運用されることで，支援方法について会議参加者から有効な策が多く見出される。しかし，会議を運営するということに重点を置き，具体的な支援の効果

を見出すことに重点が置かれない場合がある。そのため，支援策が有効に作用しない場合が多く，教員は有用感を感じにくいことが指摘されている (三田地, 2007)。そこで，専門家の指導助言のもと児童生徒の問題の解決を図っていく活動としてコンサルテーションがある。コンサルテーションとは、異なる専門性をもつ複数の者が、援助対象である問題状況について検討し、よりよい援助の在り方について話し合い、具体的な支援方法について指導助言するプロセスである (中野 , 2003)。ただし一般的に、コンサルテーションは専門的な支援方法を学校全体へ普及させることができる反面、その扱う内容が幅広くなったり、具体的に何を連携して実施をし、評価していくかがあいまいになってしまう現状がある (岡田ら , 2008)。このような背景を受けて、行動コンサルテーションという考え方、方法が提案されてきている (加藤ら , 2004)。行動コンサルテーションとは、専門性をもつ外部支援員と学級担任が協働して、応用行動分析で明らかになっている方法や技法を用いて児童生徒や学級全体を支援していく取り組みである。

専門家と協働するファシリテーションやコンサルテーションは，学校や教員だけでは難しい適切な提言や支援が可能となる一方，外部の専門家の定期的な訪問とその都度の予算が必要となる。加えて，いまだ具体的な実践例は少なく，学校現場での有効性や課題の検証が今後必要である。ところで，文部科学省 (2003) の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」では，教師の専門性の強化が課題であると示されている。よって，外部の専門家や支援員による介入だけでなく，学校内において教員によって問題行動に対応を行えることが望ましい。このような視点から筆者らは，学校において教員が主体的に児童生徒の問題行動への対応できる取り組みとして，TIPS(Team-Initiated Problem Solving; チームによる問題解決，以下 TIPS と記す) に着目した。

本研究では，2017 年 3 月 1 日にアメリカ・デンバーで行われた Association for Positive Behavior SupportConference / Workshop へ参加することによって，アメリカにおける TIPS の実際について得られた知見についてまとめる。ワークショップの中で示された知見と資料，そして TIPS に関する文献を講読し，日本の学校現場への適用が可能であるかについて検討を行うことを目的とする。

Ⅱ．TIPS の概要

TIPS とは，学校における問題行動の解決を，校内においてチームで目指す概念モデルである (Todd et al., 2013)。TIPS の実施にあたっては，教員に対してトレーニングが実施される。トレーニングは教員に対して 1 日，校内の TIPS リーダーに対して 1 日実施される。これまでの TIPS が未導入であった学校の問題解決の方法では，正確な問題特定ができず，問題解決が適切に行われない場合があった。また，これまでの問題解決の方法では，データ収集や支援者，会議の司会などの役割は決めていたが，明確なタイムラインがなく，問題に応じてタイムラインが異なることが多くあった (Newton, Horner, Todd, Algozzine, & Algozzine, 2012)。このような問題に対し TIPS は，TIPS 独自のシート（**Figure 1**）を用いて問題を正確に特定することができる。解決に向けて開発的かつ予防的で，支援者自身の支援コストを重視している。また，支援に向けた話し合いの手順と支援のタイムラインを明確にすることで，支援の効果を明確に示すことができるものであり，その確認項目も作成されている（**Table 1**）。

TIPS は次の 6 つのサイクルで運用される。1. 正確な問題の特定，2. どのように変化させていくかという目標設定，3. 解決に向けた行動の文脈に沿った支援計画の作成，4. 計画した支援の完全実施，5. モニタリングによる支援計画の目標との比較，6. 支援を整理し評価，解決の判断（**Figure 2**）。さらに TIPS はこれまでの問題解決の方法と異なり，このサイクルをすべてデータの収集と活用を基盤にして行うことが特徴である。データは代表的なものとして，アメリカの学校現場で子どもの問題行動の指標として用いられる ODR(Office Discipline Referral；校長及び保護者に報告義務のある子どもの問題行動報告，以下 ODR と訳す) が活用される (Sprague, Sugai, Horner, & Walker, 1999)。このような子どもの具体的な行動に着目されたデータに基づいて支援を討議する TIPS によって，会議はおよそ半分の時間に短縮し，教員と学校の子どもの問題行動に対する支援コストを大きく低減させることが実証されている (Todd, 2017)。TIPS は 1 つの問題事案の解決に対して 5 名から 6 名の校内の教員で行われる。参加者は，管理職，ファシリテーター，タイムキーパー，データ収集・分析係，担任，PBIS リーダーの 5 名と，問題によって支援を担任以外が行う場合は，そのメンバーに支援者が加わる。

Ⅲ．TIPS の実際

ここでは、TIPS の問題解決の過程 (**Table 2**) を実際の事例に沿って紹介する。

【事例 1】3 年生における昼食時の問題

TIPS の始まりは，まず問題の発見である。これは今までの問題解決の方法と変わらない。しかし

_____ 会議時刻　　学校名:

	日付	時刻(開始時刻と終了時刻)	場所	ファシリテーター	タイムキーパー	データ分析・収集係
今日の会議	1 月 18 日	15:00-16:00	会議室	アン先生	エリン先生	ケーティー先生
次の会議	2 月 14 日	15:00-16:00	会議室	アン先生	エリン先生	ケーティー先生

会議参加メンバー(実際に参加したメンバーの左側に×を書きます)

×	アン先生	×	ケーティー先生	×	オーエン先生	×	ナッド先生	×	エリン先生	×	コーディー先生

本日の議題:		次の会議(振り返り会議)に向けての議題
1. 議事録を確認	3. 組織の役割分担の確認	1.
2. バス 512 号車の問題行動データの収集結果について	4. 会議の評価	2.

現在の問題の状況・機能的理解

全体的な問題行動/詳細な問題行動	使用された測定	データ収集スケジュール	現在のレベル/レート
バス 512 号車車内の問題行動	ODR	毎月	0.55 枚 /日（目標は 0.22 枚 /日）

問題行動の解決策

会議初回の日付:

簡単な問題の説明(例えば、生徒名、クラス・学年、問題行動のタイプなど):

振り返り会議の日付

問題の正確な把握 ➔言語化 *何？いつ？どこ？誰？どうして？どのくらいの頻度で？*	目標設定 ➔ 計画設定 *何？いつまでに？*	問題解決に向けて➔解決策の実施 *誰によって？いつまでに？*	忠実に実施するために ➔ 結果データ *何？いつ？誰？*	解決支援策を実行する	解決支援策を実行したか？ *(現在の行動を確認し、目標と比較する)* ⬇	
バス 512 号車内の 4 年生と 5 年生は、冬休み以降、バス乗車中の身体的暴力と不適切発言に関する ODR が急増している。バス運転手は、後部座席に座っている子どもたちがけんかをしているのだと考えている。 ***現在のレベル:***	・バス 512 号車で 2 月 1 日までに 1 週間に 1 回未満の ODR となることをはじめの目標とする。 ・次の目標は、バス 512 号車で 3 月 1 日までに 1 ヶ月あたりの ODR が 2 件未満となることとする。	・バス 512 号車の座席は指定席とし、座席に子どもを割り当て、バスのルールを再度子どもに説明する。 ・ナッド先生は 1 月 25 日までにバス運転手に面会して説明する。 ・1 月 28 日には新しい座席で通学を始める。 ・子どもが望ましい行動をしているときには、バスの運転手に称賛してもらう。（ルートごとに 1〜2 回、不定期で） ・1 月 28 日までにナッド先生が親に通知する	*どのようなデータを収集するか？* *何？いつ？誰？* ・1 月 15 日までにアン先生が次の会議日程について他の教師の了解を得る ・オーエン先生は、バス運転手、E メール係と面会し、支援の計画を伝える ・ナッド先生は親に通知する *どんな結果データを収集するか？* *何？いつ？誰？* ODR を 2 月 14 日までにケーティー先生が収集する		***データの実際*** ・バスの座席は新たに生徒に割り当てられているが、その座席での通学はこれから行われる。 ・バス・ドル制度はまだ開始していない。 ***解決支援策の実行の状況*** ☐実行していない ☑一部実行している ☐完全に実行している ☐終了している メモ: バスのルールを見直す時間が必要なので、今週の会議はここで終了する。 明日はバス運転手に新しい座席を渡し、水曜日に面会する。	***結果データ****(現在の状況)*: 1 月 3 日〜16 日の ODR（1 日あたり約 3 回） ***設定した目標との比較*** ☐悪い ☐変更なし ☑改善したが目標に未到達 ☐目標達成 メモ:
					次のステップ	
					☐現在の計画(解決支援策)を継続する ☐計画を変更する ☐計画を中止する ☐その他 メモ:	

TIPS II(September 2015). Meeting Minutes Form

Todd, A. W., Newton, J. S., Algozzine, K., Horner, R. H., Algozzine, B., &Cusumano, D. L. (2013). The Team Initiated Problem Solving (TIPS II). Eugene, OR: University of Oregon, Educational and Community Supports.

Figure 1 TIPSのデーターフォームシート

Table 1　TIPS の実施確認事項

会議について	スコア
1 管理職、ファシリテーター、タイムキーパー、データ収集・分析係、担任、PBISリーダーが参加します。	0・1・2
2 会議のメンバーには、問題解決方法を考案し実行する権限があります。	0・1・2
3 時間通りに会議を始めます。	0・1・2
4 会議は時間通りに終了するか、メンバーは会議の時間を延長することに同意します。	0・1・2
5 メンバーは、迅速かつ定期的に会議に出席します。	0・1・2
6 全員で議題について考え、会議の議論を展開し、会議中にすべてのメンバーが情報を参照できるようにします。	0・1・2
7 以前の会議の議事録が準備され、会議中に利用できます。	0・1・2
8 次の会議の日程は、会合の終わりまでに決定します。	0・1・2
9 会議の議事録は、会議の終了後24時間以内にすべてのメンバーに配布されています。	0・1・2
合計	
パーセンテージ(合計/18)	
問題行動の解決について	**スコア**
10 チームはTIPSデータフォームシートを使用します。	0・1・2
11 以前のすべての問題行動の解決支援策を確認します。	0・1・2
12 定量的なデータが入手可能であり、データは常に見ることができます。	0・1・2
13 問題の何が、いつ、どこで、誰によって、なぜ、どのくらいの頻度で、を定義します。	0・1・2
14 討議されたすべての問題は、解決支援策が策定され、明文化されます。	0・1・2
15 解決支援策について計画（誰、何、いつ）を立案します。	0・1・2
16 解決支援策が設定されている問題に、目標を設定します。	0・1・2
17 データを収集しつつ支援を確実に実行するために、スケジュールを設定します。	0・1・2
18 生徒の社会的/学業的成果の測定値は、問題ごとに明文化され、それらのデータを収集するスケジュールも記録します。	0・1・2
合計	
パーセンテージ(合計/18)	

本項目について：以下の項目を、会議とデータに基づく問題解決を計画、実行、継続するための進捗ツールとして使用します。各項目は、0から2のスケールでスコア付け(0 =実行されません。 1 =部分的に実行できました。 2 =完全に実行できました)。スコアをつけた後は、会議と問題解決の2つの領域を別々のスコアとして合計し、これを合計(18)で割り、パーセンテージを算出します。 本シートのスコアが85%を達成ししている場合、TIPSは忠実に実行されています。

Table 2　TIPS の問題解決の過程

	何をすべきか	参加者への質問
支援実施前	正確に問題を特定する	何が問題で、誰が、どこで、いつ、なぜその問題行動は生じているのですか？
	支援の目標を特定する	問題をどのように変えたいのですか？ 私たちが目標を達成したことを示すには、どんなデータが必要ですか？
	状況把握による解決策の決定と実施計画の作成	問題をどうやって解決しようとしていますか？ 私たちはどのようにして行動の変化をもたらすのでしょうか？ 解決策は問題に適していますか？ 解決策は望ましい変化を生み出す可能性がありますか？
支援実施後	支援プランに沿った解決策の実施	解決策が計画通りに実施されたことは、どのようにわかりますか？ 計画通りに解決策を実施しましたか？
	問題の改善の経過と目標との比較	私たちは問題を解決していますか？ 目標が達成されていますか？
	まとめ・支援の終了	問題は解決されましたか？ 目標を達成しましたか？ 私たちは次に何をすべきですか？

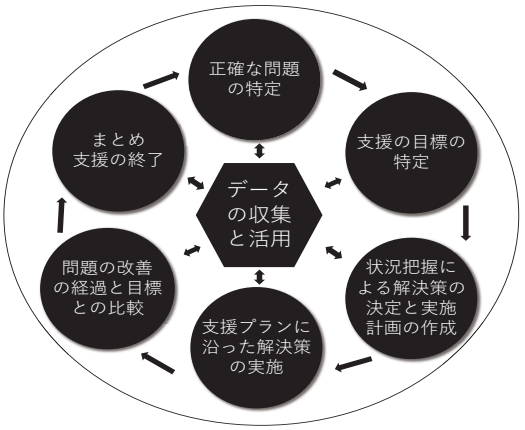

Figure 2 TIPS の会議運営サイクル

TIPS は，例えば “3 年生の問題行動が全学年平均より高いため，3 年生は問題である。” という抽象的に問題を捉えるのではなく，問題をより具体的かつ明確にし，“3 年生はカフェテリアでの 11 時 30 分から 12 時 30 分までのランチの時間，問題行動が時間の経過とともに増加している。これは 3 年生の児童が昼食後に行う読書に興味を持てずに，読書に取り組めないからである。” というように，具体的に場所や時間，問題行動の経過や考えられる要因を，データの収集を通して特定する。この特定によって，会議で議題として話し合うことができる。またデータを収集しておくことで，その問題行動への支援の効果をモニタリングし，支援の効果が確認できることから，円滑に支援を終了することができる。

会議では，まず発見された問題に対するデータの収集が行われる。先のカフェテリアの問題において，問題の本質は問題行動の増加と読書行動の減少であった。これらを特定するために，データ収集・分析係の教員は，その問題の本質に着目する。そして，その問題行動は誰が (Who)，さらにどの場面で見られるか (Where) を特定する。次に，その場面では，どのような問題行動が見られるか (What) を観察する。加えて，その場面での問題行動が主にいつ生じているか (When)，そしてなぜ起きているか (Why) についてデータに基づいて調査を行う。観察や測定が難しい場合は，その問題行動を起こした児童に話を聞くなどして，問題の本質を明らかにしていく。このように，Who，Where，What，When，Why の 5 つのデータ収集の観点から特定することで，問題が明確になる。問題の本質をデータに基づいて特定することによって，問題の中でも，具体的な行動に着目し，その行動の回数をモニタリングすることにより，支援の効果を確認していくことができる。この過程によって，学校内において，例えば暴力行為，走る行為などといった抽象的で漠然な行為を問題行動と呼ぶのではなく，具体的な行動を特定して着目する文化を学校に根付かせることが可能となる。行動を特定したら，次にその目標を設定する。目標の多くの場合はパーセンテージで示し，○％の児童が走っている，○％の児童が読書に取り組んでいる，というように数値化し，この数値の目標値を設定する。また可能であれば，その行動はポジティブな行動に着目して目標を設定することが望まれる。

【事例 2】4 年生と 5 年生のバスでの問題

登下校で使用されるバス車内で，下校する 4 年生と 5 年生において，最近の冬休みが終わって以来，身体的な攻撃行動と学校のバス乗り場での不適切な言動が急増していた。バス運転手は，後部座席に座っている子どもたちとけんかしているからだと考えている。ここでは，具体的な問題のアセスメントの方法を，実際に教職員によって作成された ODR のデータと合わせて紹介する。

まず，バス 512 号車が，他のバスと比べて問題が多いのか少ないのかを検討するために，4 年生と 5 年生が乗車するバスにおける ODR を調査し，問題行動の発生数を比較した (Where,When)。その結果，バス 512 号車の帰りのときのみ，著しく問題行動が見られることが分かった（**Figure 3**）。同時に，データ収集係が ODR を調査し，バス車内で物理的な攻撃行動を行っている学年を明らかにした (Who)。その結果，4 年生と 5 年生児童が攻撃行動を行っていることが分かった（**Figure 4**）。同時にどのような攻撃行動が見られているかを ODR を通して調査した結果 (What)，言語的挑発と身体的攻撃が多くみられた（**Figure 5**）。

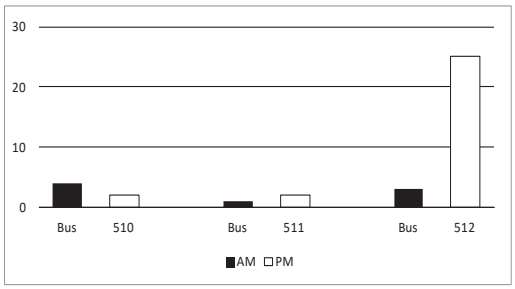

Figure 3　バスごとに見た問題行動数

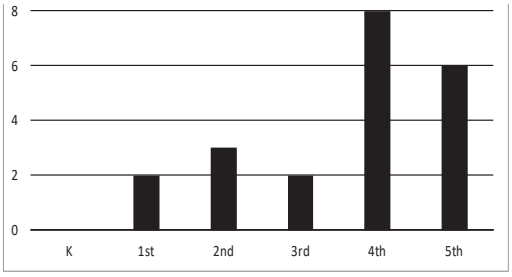

Figure 4　バス 512 における学年別問題行動数

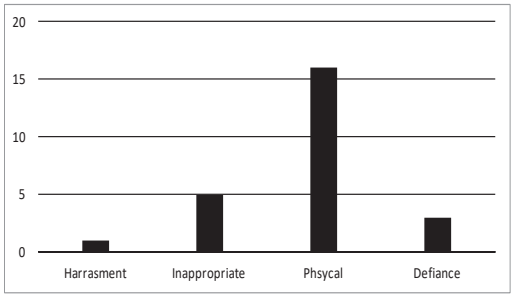

Figure 5　バス 512 の午後に起こる問題行動の種類とその数

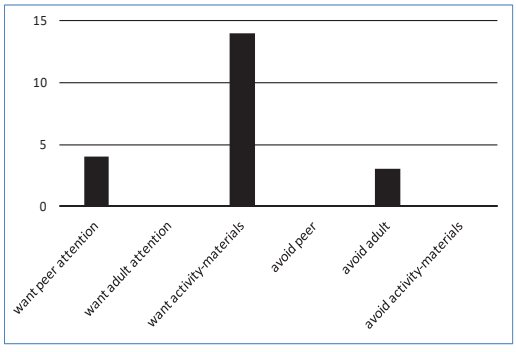

Figure 6　バス 512 における問題行動の原因

問題行動が見られた児童への「どうしてそのような行動をしてしまったか」という質問を通して (Why)，活動したい欲求があることが分かった（**Figure 6**）。このデータにより，4 年生と 5 年生が下校中のバス 512 号車の中で問題が急増した原因は，冬の間雪のため外での活動ができず，活動欲求が学校の課程内で消化されなかったことであると考えられた。それによって 4 年生と 5 年生の身体的な攻撃行動と学校のバス乗り場での不適切な言動が急増したという見立てがなされた。これらデータと見立てからチームで討議し，問題行動の支援策として，1. バスの席を指定席とする。2. バスのルールを再度説明する。3. バス運転手に面会して，問題を説明する。4. 子どもが望ましい行動をしているときは，バスの運転手に称賛をしてもらう。5. 問題及びその支援策を親に通知する。の 5 点が挙げられ，期日を決めて支援策を始めることとした。このように，TIPS では，データに基づいて，問題行動の要因を特定しチームで討議する。これらのデータによって導き出された要因を踏まえて，支援策を計画し，データを継続的に収集することによって，問題行動をモニタリングし，最終的な解決を目指すことができるのである。

Ⅳ．日本の学校における問題行動の対応への示唆

1．問題行動の明確化

TIPS は，問題行動を何が，いつ，どこで，誰によって，なぜ，どのくらいの頻度で，と明確にすることが特徴である。丁寧なデータ収集に基づいて，問題行動を明確にすることで，支援が的確に実行できるようになっている。チーム支援においては「目的の共有」「情報の共有」「方針の共有」「役割の分担」が重要であると指摘されるが (長江ら , 2013)，TIPS はそれらについて具体的な手順を示し，そして示された手順が学校内で円滑に行えるように整理されたモデルである。このようなモデルは，これまでのわが国の学校現場であまり見られないものであった。わが国の学校現場では，それぞれの学校独自の方法や，ファシリテーションを行うスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの独自の方法に委ねられている。さらに，わが国の学校現場での今までの会議では，問題行動はある程度特定されるものの，その問題行動の原因を子ども本人や，家庭環境の影響に求めることがしばしばあった (亀口 , 1987)。しかし TIPS は，子どもの明確に定義された問題行動に着目し，その行動を学校環境の変容やスキルの教育を通して改善を図ることを目指している。それによって問題行動の低減が図られ，図られない場合には再度検討するよう，シートは手順化されている。

2．データに基づく会議

Figure 2 でも示されているように，TIPS はすべての手順において，データに基づいた討議がなされる。解決支援策がうまくいっているか，改善しているかの判断を丁寧に行うことは，三田地 (2007) が指摘する教師の有用感を高めることにつながる。TIPS のデータ収集・分析の特徴は，何が，いつ，どこで，誰によって，なぜ，どのくらいの頻度で，と明確にすることである。そして，これらは現場の教員にとっても，わかりやすい手順である。これまでわが国の学校では，児童生徒の問題行動に関するデータを収集したり活用するということがあまり見られなかった。それは，教員がデータに基づいた支援に取り組むことが大切であるとは理解しながらも，どのようなデータを収集したらいいか，何を参照すればいいかわからないことが問題であったと考えられる。また，研究の分野では様々なデータが活用されていることは理解しつつも，そのようなデータ収集が学校現場には根付かないのではないか，という危惧もあった可能性もある。しかし，この TIPS のデータ収集の手順は，単純であり，学校教員でも収集可能なものである。このように，専門性を持ちつつも学校現場に合う形でモデルを示している点から，わが国の学校現場においても TIPS は有効なモデルであると考えられる。また，TIPS は教員の会議運営スキルの習得を目指した訓練プログラムも開発されている (Todd et al., 2013)。そのプログラムを使用することで，学校現場への導入はより容易になり，外部の支援員や専門家に頼らない，学校内の教員による問題行動への対応が実現できるだろう。

3．わが国の問題行動への指導の課題と今後への示唆

わが国の学校現場では，問題行動が増加した場合に，その問題行動の背景にある要因について，その児童や集団への指導や説諭の中で情報収集することがしばしば見られる。TIPS のように，行動観察で収集されたデータに基づいて問題行動の増加を確認してから，チームで問題の所在を機能的に明らかにするアセスメントは，行われることが少ない。よって日本における問題行動の対応においては，教師個人の子どもとの対話のスキルや，日頃の子どもの行動の観察力など，学校組織としてのチームではなく教師一人ひとりの力量に委ねられているところがあった。

これまでの日本の学校における子どもの問題解決方法については，例えばインシデントプロセス法 (Pigors, Pigors,& Pigors, 1980) や短縮事例法 (嶋崎 , 2012) など，様々な会議の方法が議論され，学校現場で導入されてきた。しかし，これらの方法は，教師の多忙化という問題に着目され，子どもをどのように支援するかという議論よりも，会議をどのように展開をするか，どのように効率的に討議を進めるかについて重きが置かれる傾向があった。TIPS は子どもの具体的な行動に着目し，学校における問題行動の解決を校内においてチームで目指す概念モデルである。このような，学校組織としてのチームによる機能的なアセスメントを重視し，データに基づいた支援を実現していくことによって，学校で生じる子どもの問題解決をスムーズに行うことができる。その結果として教師の負担感の軽減や，有用感の向上を図ることができるだろう。

今後，わが国の学校現場において TIPS を用いた会議の実践事例の蓄積が求められる。それにより，我が国の学校現場における TIPS の有効性ならびに課題を検証していきたい。

Ⅴ．引用・参考文献

亀口憲治　1987　問題行動の原因認識に関する実態調査をふまえて (IV. 公開「小・中学校における心の健康づくり : 今日の問題行動とその対策への提言」) 教育心理学年報 , **26**, 18.

加藤哲文・野口和也　2004 行動コンサルテーションの方法 : 特別支援教育を支える行動コンサルテーション学苑社 42-64.

三田地真実　2007 特別支援教育を支える「3 つの F」-- ファミリー中心 (ファミチュー) 哲学 , 応用行動分析学 (ABA) の視点によるファンクショナルな (機能的な) 物の見方 , ファシリテーション　共生科学研究 , **(3)**, 41-56.

文部科学省　2016　平成 27 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査　<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/1378692.htm>（2017 年 3 月 21 日）

文部科学省　2012　通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について　<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm>（2017 年 3 月 21 日）

文部科学省　2003　今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/attach/1361204.htm>（2017 年 3 月 21 日）

長江綾子・山崎茜・中村孝・枝廣和憲・エリクソンユキコ・栗原慎二　2013 米国における包括的アプローチに関する一考察 : PBIS の視察から　学

校教育実践学研究 , **19**, 73-82.
中野民夫 2003 ファシリテーション革命 : 参加型の場づくりの技法 岩波書店
Newton, J. S., Horner, R. H., Todd, A. W., Algozzine, R. F., & Algozzine, K. M. 2012 A pilot study of a problem-solving model for team decision making. *Education and Treatment of Children*, **35(1)**, 25-49.
岡田博・船橋篤彦・森一晃・小嶋やよい 2008 学校外の専門家と連携した行動コンサルテーション適用による効果の検討―教科の授業場面において不適応行動のある子どもの行動支援の事例―治療教育学研究 , **28**, 63-70.
大阪府教育委員会 2015 5 つのレベルに応じた問題行動への対応チャート <http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/taiou/taiou.html>（2017 年 3 月 21 日）
Pigors, P. J. W., Pigors, F., & Pigors, F. C.1980 The Pigors incident process of case study (Vol. 29). Educational Technology.
佐々木千里 2007 児童生徒の問題への対応について学校に求められる視点とケース会議の意義 -- スクールソーシャルワークの活動実践における一考察 (特集わが国における学校ソーシャルワークの構想 , その可能性) 学校ソーシャルワーク研究 , **(1)**, 87-95.
嶋崎政男 2012 短縮事例法とその工夫―多忙な現場で手間をかけないために 児童心理臨時増刊 No.960 金子書房 66-71.
Sprague, J. R., Sugai, G., Horner, R., & Walker, H. M. 1999 Using Office Discipline Referral Data To Evaluate School-Wide Discipline and Violence Prevention Interventions. OSSC Bulletin, **42(2)**, n2.
Todd, A. W., Newton, J. S., Algozzine, K., Horner, R. H., Algozzine, B., & Cusumano, D. L. 2013 The Team Initiated Problem Solving (TIPS II) Training Manual. Eugene, OR: University of Oregon, Educational and Community Supports.
Todd, A. W. 2017 Association for Positive Behavior Support Conference Workshop Denver Downtown Sheraton Hotel 1/3/2017

Utilization of Team-Initiated Problem Solving Model in the USA
―Realization of team support at schools ―

MATSUYAMA Yasunari, Hiroshima University
FUKUI Ryuta, Ibaraki Pref. University of Health Sciences
ICHIKAWA Satoshi, Osaka Sangyo University

Information about conducting Team-Initiated Problem Solving Model (TIPS) and methods of using itin the US was collected, and the possibility of applying it to team support in Japanese schools was examined. Results indicated the following characteristics of TIPS: (1) Collection of TIPS datais conducted simply and clearly for itemsincludingwhat, when, where, by whom, and how often, and analysis and examination are conducted by allocating roles to teachers. (2) The TIPS model focuses on clearly defined problem behaviorsof childrenand aims to improve these behaviors by changing school environment and skills education. (3) The TIPS model is easily introduced in schools by using training programs developed to help teachers acquireskill in running conferences. Based on above characteristics, it would be highly possible to apply TIPS, which places importance on efficient assessment by school organization as a team, to realize data-based support inJapanese schools. It is suggested thatTIPS would be useful for providing team support in schools.

[Keywords] Positive Behavior Interventions and Supports (PBIS), Team-Initiated Problem Solving Model (TIPS), Team support at schools

2017.7.19 受理